

折り返し

2021.2.22

私は、今でも自分が40歳を迎えたときのことを覚えている。今では、人生百年時代などと言われているが、健康でいられることを考えれば、人生80年であろう。すると、40歳ということは、ちょうど人生の折り返しとも言える。

このことに考えが及んだ途端、焦りだし、どうにもこうにも怖くなったことを覚えている。先が見えないまま進んでいるときはよかった。それが、急に先が見えるようになると怖くなるということがわかったのである。

孔子は、「四十にして惑わず」と言ったが、人も四十ぐらいになると、一応の落ち着きが出てきて、人としての道も、一応おぼろげながらわかりかけてくるものだろう。仮に人生を山登りに例えると、40歳はちょうど山の頂のようなものである。山の頂に立ってみると、今まで自分が歩んできた道も、初めてしみじみと振り返ってみることができる。また、後半生をいかに生きてらよいかということも、今後下り行くべき道の大体の見当がつくように、ほのかに見え始めてくる。

したがって、人も40歳になったならば、自分の一生について、大体の見通しが立たなければならぬ。我が命の果てる地点についても、おおよその見当がつかなければならぬ。あと40年しかないと思うと、焦ってくるのである。

一方で、40歳頃までは、とかく迷いやすいのも事実である。一日一日の歩みが、40歳の関所をいかに越えるかを決定しつつあると言ってもよい。故に、40歳までは、もっぱら修業時代と心得たほうがよい。現に山登りでも、山頂まではすべてが登り道である。日々、自己を磨くことに専念することが大切である。

現役で活躍できるのを60歳頃までと考えると、20歳までが志を立てる時代である。人のため、世の中のために役に立つ人間になろうという志は、15歳頃から遅くとも20歳までには確立したい。そして、それから以後の20年は、いわば準備期と言ってよい。同時に、この20歳から40歳までの20年間の準備いかんが、その人の後半生の活動を左右する。

40代と50代という、人間の仕上げ期の活動は、それまでの前半生において準備したところを社会に貢献すべき時期である。したがって、40歳までの準備が手薄だと、40歳以後60歳までの活動も薄弱とならざるを得ない。

ところが、多くの人は、自分が社会的に活動する年頃になってみて、初めて自分が過去20年間、その準備期を怠ってきたことに気づき始める。40歳になって初めてこの真理に気づき出すというのは、それまでの歩みがおろそかだった証拠である。自己の前半生に対する一種の悔恨として気づくわけである。かく言う私もそうである。

そこで、自己の過ちを深刻に自覚するとともに、せめて後に来る若い皆さんに、自分と同様の過ちを二度と再び繰り返させたくないとの念が湧くわけである。これが、教育の第一歩なのではないかと思う。現役で活躍できるのが短くなってくると、さらに焦るのが正直なところである。